

ヘルマン・ヘッセ著、相良守峯訳「^{ひょうはく}漂泊の^{たましい}魂—クヌルプ—」岩波文庫、岩波書店 1938年1月20日刊を読む

漂泊の魂—クヌルプ—

1. クヌルプは言った。

「人間というものは、みんなそれぞれの魂を持っていて、それを他の人の魂と混和させることは出来ない。二人の人が相並んで歩み、相ともに語り、或いは寄り添っていることはできよう。が、魂は、草花のようにそれぞれ定められた場所に植えつけられているので、互いに歩み寄るといふわけにはゆかない。強いてそうしようとするなら、根を断つよりしかたがないのだが、そんなことも不可能だ。花は、相交わりたければ、香りや花粉を送るのだが、花粉が適当な箇所に行き着くようにするのは花自身の力ではなくて、風がそれをするのだ。風は、自分の好むままにどこにでも吹き通うことができる。」

2. また、しばらくしてこうもいった。

「僕がさっき話した夢も、たぶんは同じような意味を持っているのだろう。僕はヘンリエッテに対してもリーザベットに対しても、故意に不当なことをなした覚えはない。が、かつてこの二人をそれぞれに愛して、自分のものにしようと思っていたために、彼女たちは僕の夢の中で、ああした、互いに似通っていながらどちらでもないというような姿となって、僕の眼に映ったのだろう。その姿は僕のものでありながら、それはもはや生き物ではないのだ。僕は自分の両親についても同じようなことを考えずにはいられない。彼らは僕のことを、自分の子供であり、自分たちと同じような人間だと思っている。が、たとえ僕が両親を愛さなければならないにしたところで、僕は、両親にとって理解のできない他人でしかないのだ。だから彼らは、僕にとって主要なもの、つまり僕の魂であるところのものをば附随的なものと見なし、青春やむら気のせいにしてしまう。その場合にだって、両親は僕を愛し、僕のためにあらゆる親切をつくしてはくれるだろう。父親というものは自分の子供に眼鼻立ちのみでなく、悟性までも遺産として与えてやれるのだ。けれども、魂だけは譲り渡すということができない。魂は、人のおおのに新しく賦与されるものなのだから。」

3. そのころの私は、まだこうした物の考え方をしたことがなかったし、少くともそんなふうを考えなければならぬ個人的な必要に迫られてもいなかったのだから、彼の言葉に対してはなんとも答えることができなかつた。が、こうした思索は、別段私自身の胸にこたえなかつただけに、ただ耳を傾けて聞いているぶんには非常に愉快であつた。そうして、クヌルプにしてみたところで、こういうことは必死の闘いというよりは遊びごとであらうと勝手に推測していたのであつた。のみならず、お互いに乾いた草に身を横たえ、夜が更けて眠りのくるまでの一刻をば、夕空に輝く星を眺めながら過ごしたあのしばしの時間は、しごく平和な、美しいものでもあつたのである。

4. 私は言った、「クヌルプ、君は思想家だ。大学教授にでもなればよかつたんだ。」

彼は笑って頭を振つた。

それから考え深げに答えた、「僕は、いっそ救世軍になら、はいれるんだ。」

この言葉は少し度はずれに聞こえた。

それで私は言った、「君は、人をからかっちゃいけないよ！そのうえ今度は聖者になりたいなどと言い出すんじゃないかならうね？」

「いいや、僕は聖者になりたいんだ。自己の思想や行為について本当に真剣になりさえすれば、人はだれだって神聖なものになるのさ。正しいことと考えたら、それを実行しなければいけない。だから、僕は、一度でも救世軍にはいることが正しいことと思ったら、その時はたぶん実行するだろう。」

5. 「しきりに救世軍を担ぐんだねえ。」

「そうとも、ひとつそのわけを話そう。僕は今までいろんな人と話し合ってもみだし、演説などもきいた。牧師や学校の先生や市長や社会民主党員や自由論者といったふうにね。けれども、そうした演説をきいていて、この人こそ心の奥底まで真剣であり、自己の知識のためには、いざとなったら一身を擲^{なげう}ってもこれに殉ずるだろう、と信じるほどの者は一人もなかった。しかし救世軍となると、楽隊付きのドンチャン騒ぎは別として、僕が見聞いた三、四回とも、まったく真剣だったのだ。」

6. 「でもどうしてそれが君にわかるんだい？」

「わけはないさ。例えば、一人の男が、日曜日に、ある村で説教をしたんだ。戸外で埃にまみれ、暑さのために、すぐ声^かが嘎れてしまう。そのうえ、あまり見かけの丈夫そうな男でもないんだ。彼は声が出なくなると、三人の仲間に讚美歌をひとふし歌わせ、そのあいだに水を一口飲む。彼の周囲には村民の半数ぐらい、大人も子供も彼を取りかこんでいて、彼を道化者扱いにし、何やかやと悪口を言っている。後ろの方に若者が一人、鞭を片手に立っていて、説教者をいやがらせるために、時折りそれを振りまわしてはものすごい音を立てる。そのたびごとに、皆が大笑いするんだ。ところが、可哀^{かあい}そうな説教者は、決して馬鹿じゃないんだが、怒りはしない。ほかの者なら、わめき立てたり悪罵^{あくば}を放ったりするところを、彼は微笑を浮かべながらその小さな声を張りあげて、この喧騒の場面に打ち克^かとうとするんだ。ねえ、君、こうしたことは、わずかばかりの賃銀^{けいげん}のためにやれるものでもなければ、楽しみ半分にできるものでもない。彼は実に自らの中に、偉大な敬虔^{けいけん}の念と確信とを抱いているに相違ないんだよ。」

7. 「それはそうかもしれない。けれども、一例をもって全般を推すわけにはいかないよ。例えば、君のように繊細で多感な人間だと、そんな場面に参加することはできまい。」

「そうでもないさ。当人が、繊細とか多感とかいった以上の立派な或るものを知り、かつ所有している場合にはね。もちろん、一例をもって全般を推すことはできないけれども、少なくとも、真理は万人にあてはまるはずなんだ。」

8. 「なに、真理だって！ハレルヤを叫んでいるあの連中が、真理を所有しているなんてことが、どうしてわかる。」

「そりゃわからない。まったくそのとおりで。けれどもね、僕の言いたいのは、もしもあの連中に真理の宿っていることがわかったら、その暁には僕もまた、彼らの後について行きたい、ということなんだ。」

9. 「つまり、もしも、というに過ぎないんだらう！ところが君ときたら、毎日一つずつ知識を発見するのはいいけれど、翌日になるとけろりとして、いっこうそれを実行しないじゃないか。」

彼は当惑げに私のほうを見つめた。

「今の君の言葉は、それはあんまりだよ。」

10. 私は自分の言い過ぎを詫びようとしたが、彼はそれをさえぎり、口をつぐんでしまった。そうして、間もなく低い声でお休みという、静かに身体を横にした。が私は、彼がすぐに眠ってしまったものとは思わない。私もまた、頭が冴えて眠られず、一時間以上も肘をついたまま、夜の景色を眺めていた。

11. その翌朝、起きるとすぐ私は、クヌルプが上機嫌らしいのを見てとった。私はそのことを彼に告げた。すると彼は、童顔を輝かせながら言った、「うまく当てられたね。ところで君は、機嫌のいい日を迎えるのは何によるものかわかるかい？」

12. 「わからない。何によるんだい？」

「それはね、まず、前の晩にぐっすり眠って、美しい夢をたくさん見なければいけないんだ。しかし、それを決して起きてまでも覚えていてはいけない。今日の僕がちょうどそういう工合いなんだ。僕は昨夜、非常に華やかで愉快的な夢を見た。しかし、今はみんな忘れてしまっている。覚えているのは、ただそれがすばらしく美しかったということだけだ。」

P.71 ~ 75

<コメント>

「車輪の下」や「少年の日の思い出」で日本でも親しまれているドイツの作家、ヘルマン・ヘッセの代表作の一つ「漂泊の魂—クヌルプ—」を岩波文庫で読んだ。この珠玉のような作品こそ、学校時代に一度はゆっくりと読み、10年か20年に一度くらいずつ再読し続けて、自分を見つめ直すのに役立てて頂きたいと希望する。

— 2016年3月25日(金) 林 明夫記 —